

倭国の乱の舞台

九州歴史資料館長・海の道むなかた館長

西谷 正

I. はじめに

倭人伝に見える倭国の乱

II. 遺跡（遺構）から見た倭国の乱

- (1) 環濠集落と防御施設
- (2) 高地性集落の分布

III. 遺物から見た倭国の乱

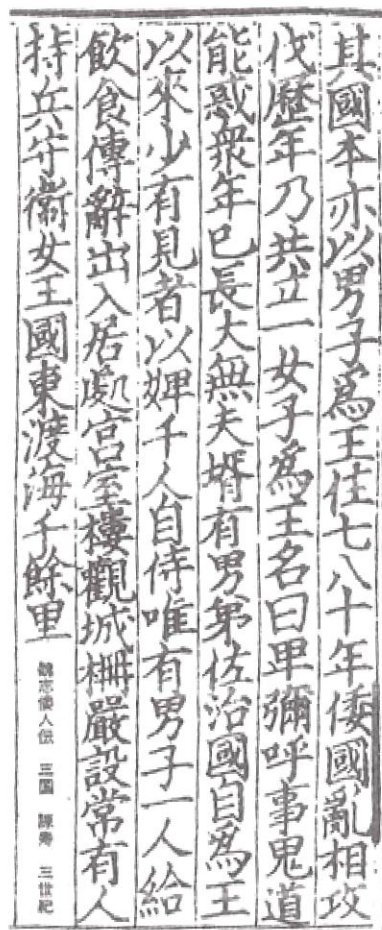
- (1) 武器の発達
 - 鉄製武器（剣・刀・矛・戈）
 - 青銅・骨・木製鏃
- (2) 礫石（つぶていし）の問題
- (3) 武具の登場
 - 木製武具（甲・盾）

IV. 韓国の乱

- (1) 魏志韓伝に見える韓国の乱
- (2) 高地性集落の分布と武器の発達

V. おわりに

倭国の乱の舞台



『魏志倭人伝』(『三國志』魏書烏丸鮮卑東夷伝)は、その国(倭国か邪馬台国か)は、もと男が王であった。七、八十年たつて倭國が亂れた、と書く。『後漢書』では、後漢の桓帝(在位一四六〜一六七)年、靈帝(一六八〜一八九)年の期間に倭國が大いに亂れた、と書く。

『隋書』は、桓帝靈帝の間にその國が大いに亂れた、と書く。『梁書』は、後漢の靈帝の光和年間(一七八〜一八四年)に倭國が亂れた、と書き、そして

卑彌呼の死後、男の王が立つて國が亂れた後、台が立つたこと、さらに彼女の後、また男の王が立つたことを書く。『北史』も靈帝の光和年間にその國が亂れた、と書く。

時代の新しい文献ほど年代を詳しくしめようようになることに危険を感じる。しかし、多くの研究者は、倭國が亂れたのは、二世紀後半ないしは末だととらえている。

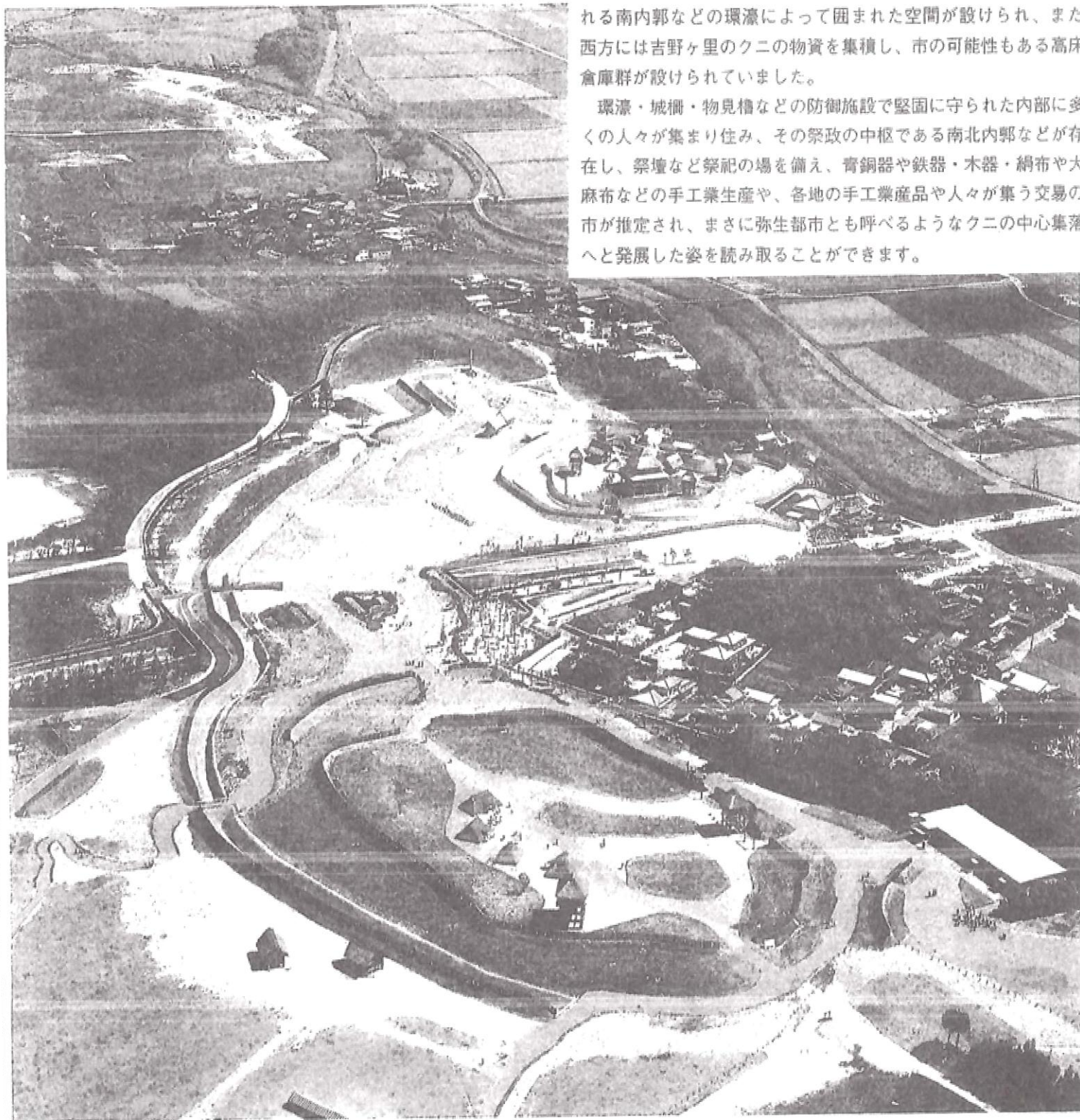
桓かん(後漢第十一代桓帝、一四七―六七在位)・靈れい(同十二代靈帝、一六八―八八在位)の間、倭国が大いに乱れ、かわるがわるたがいに攻伐し、歴年、主がいなかった。一女子がおり、名を卑弥呼と^いった。年が長じても嫁にゆかず、鬼神の道につかえ、よく妖をもって衆を惑わした。そこで、共に立てて王とした。侍婢は千人。顔を見るような者も少ない。ただ男子一人がおり、飲食を給し、辞語を伝え、居処・宮室・楼觀(楼閣)・城柵など、みな兵器をもって守衛し、法俗は嚴峻げんしゅんである。

魏志倭人伝 三国 陳寿 三世紀

その国では、もともと男子が王位についていたが、そうした状態が七、八十年もつづいたあと、「漢の靈帝の光和年間に」倭の国々に戦乱がおこって、多年にわたり互いの戦闘が続いた。そこで国々は共同して一人の女子を王に立てた。その者は卑弥呼ひみこと呼ばれ、鬼神崇拜の祭祀者として、人々の心をつかんだ。彼女はかなりの年齢になっても、夫はなく、その弟が国の統治を輔佐した。王位に即いて以来、彼女に目通りした者はほとんどない。千人の侍女を自分のまわりに侍らせはべ、男子がただ一人だけいて、飲食物を運んだり、命令や言上の言葉を取り継いでいた。起居するのは宮室や楼觀たかどのの中で、まわりには城壁や柵が嚴しくめぐらされ、兵器を持った者が四六時中、警護に当たった。

巨大環濠と大型建物

—佐賀県吉野ヶ里遺跡—

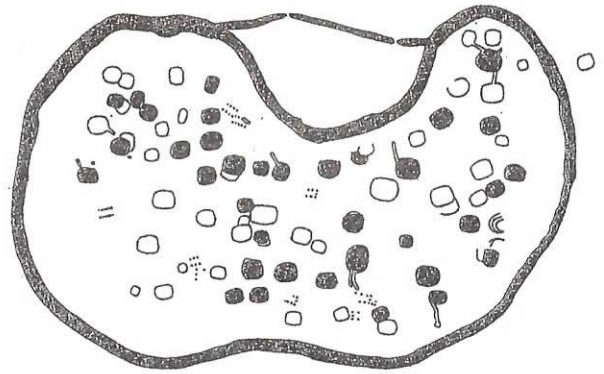


後期の集落 弥生時代後期になると、北方へと規模を拡大し、ついには40haを越す国内最大規模の環濠集落へと発展します。内部には物見櫓を備え、大型の祭殿をもつ首長の居住や祭祀の場と考えられる北内郭や、高階層の人々（大人）の居住区と考えられる南内郭などの環濠によって囲まれた空間が設けられ、また西方には吉野ヶ里のクニの物資を集積し、市の可能性もある高床倉庫群が設けられていました。

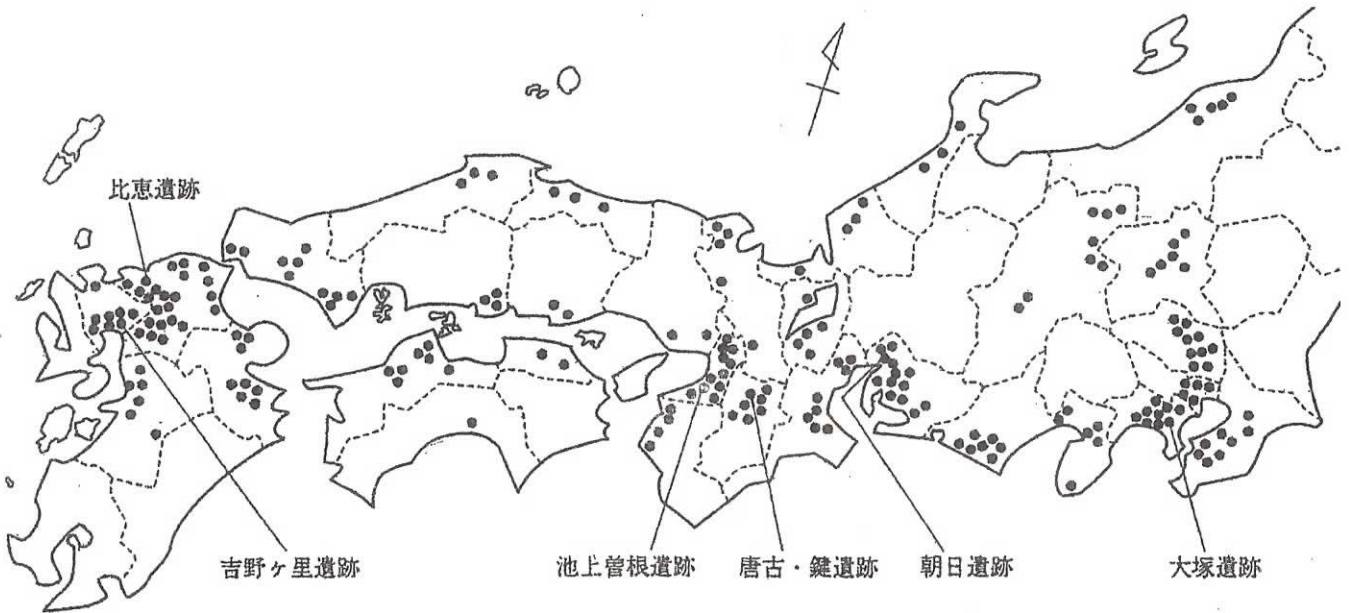
環濠・城柵・物見櫓などの防御施設で堅固に守られた内部に多くの人々が集まり住み、その祭政の中核である南北内郭が存在し、祭壇など祭祀の場を備え、青銅器や鉄器・木器・絹布や大麻布などの手工業生産や、各地の手工業産品や人々が集う交易の市が推定され、まさに弥生都市とも呼べるようなクニの中心集落へと発展した姿を読み取ることができます。

佐賀県教育委員会 2001

縄文時代にも小さな争いはありましたが、集団と集団との間の大規模な争いは、弥生時代からはじまったようです。それは収穫物、耕地、鉄などの財産をめぐる争いだったと思われます。人々はムラの回りに環濠という大きな溝をめぐるして争いに備えました。横浜 市域では、このような溝で守られたムラ(環濠集落)がたくさん発見されています。環濠集落からは、争いによって焼かれたと思われる住居のあとが、数多くみつかります。



大塚遺跡の火災住居の分布
横浜市歴史博物館, 1995 『常設展示案内』



日本列島における弥生時代環濠集落の分布の概観 (約500カ所ある)

高島忠平, 2005 「邪馬台国への道—なせや不弥国はせんか—」 『邪馬台国シンポジウム in 飯塚』

- ・第V様式 (弥生時代後期)、防禦的集落址分布
- ① 畿内勢力の東海地方への進入
- ② 吉備 (畿内) 等勢力の北九州地方への進入
- ③ 吉備勢力の大和への進入



「大乱」の推定地域

前澤輝政, 1996 「<倭国大乱>考」 『古化学研究』 第135号



守りの固い東海の村

土できずいた防壁、壕、逆茂木という古語を思わせる枝つきの木の2重防御柵、先を斜めにきって斜めにうった杭、全国の弥生村で、この愛知県朝日の前1世紀の村ほど守りの固いものはない

国立歴史民俗博物館, 1996

『倭国乱る』朝日新聞社





1

倭国乱のころの 守りの村

水田で稲を作る人びとが不便な山の上に住まなければならなかったのは、敵が存在したからだ。遠望のきく山の上で敵の動きを見、烽火^{のろし}で知らせることができる。この有利さが、不便さをたえさせた。

倭国乱前後の戦いについての考古資料は多くない。ひとつには、石器が消えて鉄の武器時代となったからである。しかし守りの村には注目すべきものが多く、ここでは、その好例をとりあげた。

大阪東北部にある古曾部^{コソノベ}・芝谷は一〇〇mの山の上の尾根の広い範囲(六〇〇×五〇〇m)を壕(幅五〜八、深さ三ないし五〜五m)で囲み、三十数軒の家が同時にあったらしい。山口県の島田川流域の山上(九八m)にある清水は、二、三重の壕の内側から重なりあって一・二軒の家がのこっていた。西ノ迫は一〇〇m前後の山頂にある一、二軒の家を鉢巻状に壕で囲んでいる。見張台^{のろしだい}か烽火台^{のろしだい}だろう、壱岐原の辻は、魏志倭人伝の「一支国」の中心とみられる。守りは固い。

2 1

山の上の大きな村	大阪府高槻市古曾部遺跡	後二世紀
弥生V期		
大規模な壕	大阪府高槻市古曾部遺跡	後二世紀
期		
岡の上の小さな村	福岡県杷木町西迫遺跡	後二世紀
生V期		
岡の上の村	山口県玖珂町清水遺跡	後二世紀
		弥生V期



情報伝達所であるとともに、最終的にはリーダーのいわば籠城と敗北を覚悟する場所ではなかったろうか。ひるがえって現代、大学紛争の折、東京大学安田講堂の屋上に立て籠った上、敗北した学生諸君のことが、ふと脳裡をかすめるのである。

以上のように田和山遺跡を見たとき想起され、また、戦国時代の里城あるいは居館に比較されるのが、平地に営まれた日常平時の拠点集落である。ここで、田和山遺跡から北方やや西寄りの眼下を見下ろすと、二ツ縄手遺跡や欠田遺跡がある。将来の調査いかんによっては、そのような拠点集落の可能性も残っているのである。そして、田和山遺跡のすぐ北側の低い丘陵上には、開発工事によって破壊されて、現在は残っていないが、友田遺跡があった。ここで、昭和五六年（一九八一）～五七年に発掘調査されたところ、弥生時代中期の墳丘墓六基・土墳墓二六基と、後期の四隅突出型墳丘墓が見つかっている。これらの拠点集落・高地性集落そして墓城などの遺跡群からは、想像をたくましくすれば、この付近に有力な地域集団の存在を認めることができるのではなからうか。もっといえば、忌部川中流域の乃木平野に、『漢書』地理志に見える百余国のような、一つの国を想定したのである。

日本列島において倭国の大乱が起っていた当時、つまり桓・靈の間（二世紀後半）のころから、朝鮮半島の東部から南部に

かけての地域すなわち韓や濊を舞台に、楽浪郡と韓・濊との間で緊張関係が生じ、いわば韓国の乱が発生する。三世紀初には、韓国の乱が鎮圧され、帯方郡の設置以後、韓と倭が帯方郡の支配を受けるようになった。そのような『魏志』韓伝の記事を見るにつけ、田和山遺跡の背後には、倭国内部の諸国間にとどまらず、帯方郡を意識した緊張感も渦巻いていたと推測するわけである。

（九州歴史資料館館長）

東アジアの古代文化 137号

●二〇〇九年一月二五日発行 最終号 通巻一三七号

●発行…大和書房

田和山遺跡は果して聖域か

西谷 にしたに 正 ただし

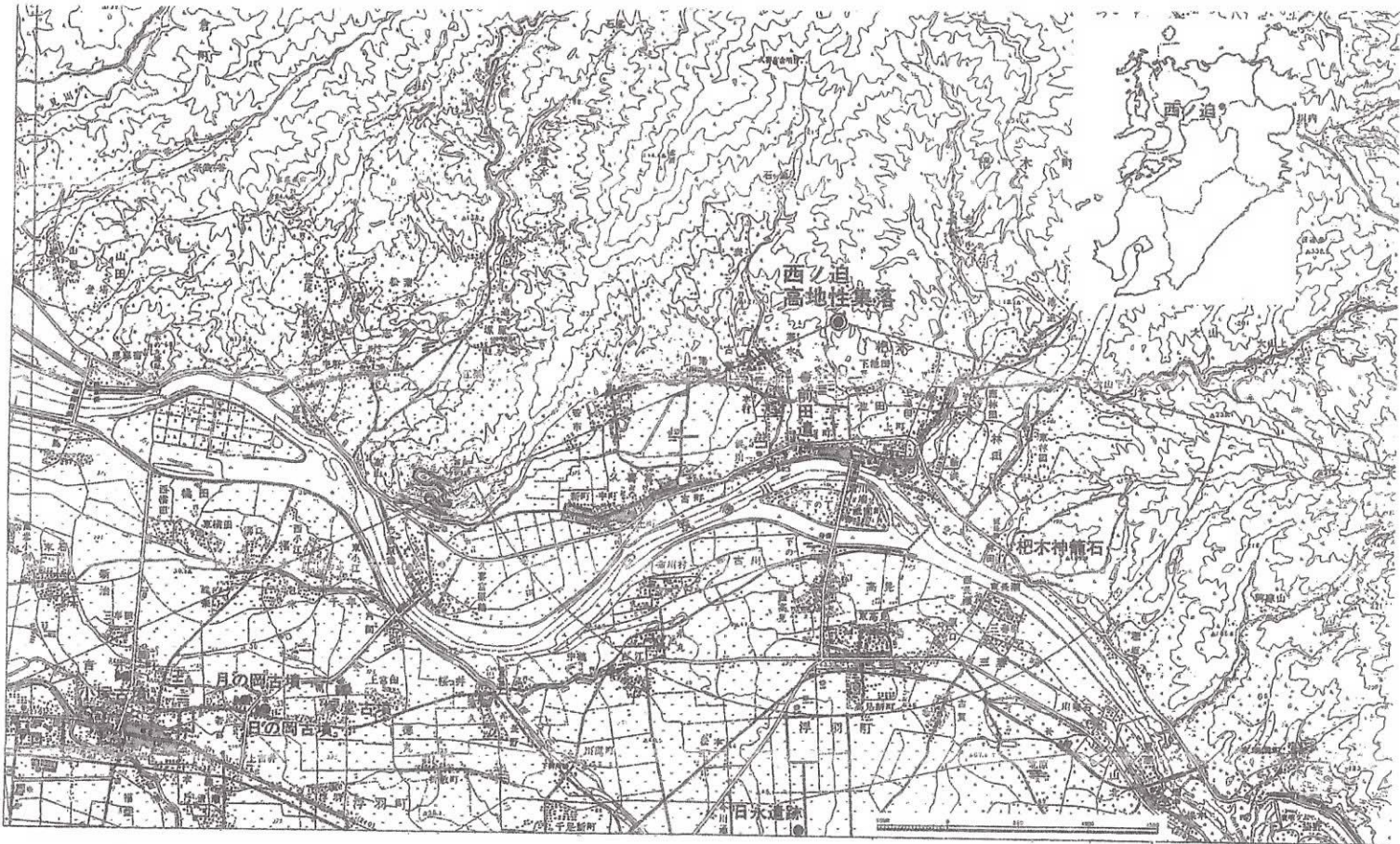
古代出雲の故地・島根県松江市に、いわゆる高地性集落の一つとして、国の史跡に指定され、保存・整備された田和山遺跡がある。標高四六メートルほどの丘陵地に残された、遺跡の頂上部に立つと、北方眼下に宍道湖と、そのさきには島根半島を望見することができる。さらに、はるか東方には伯耆の大山が見える日があるという眺望のよいところに遺跡は立地している。

一九九七年（平成九）〜二〇〇〇年にかけて、開発にさき立つ事前調査として行われた発掘で、重要な遺構と遺物が検出された。遺跡は、弥生時代前期末〜中期に営まれた三重の環壕集落で、環壕外縁までの規模は南北約百数十メートルに東西約一九〇メートル近くを測る。このような環壕の規模に比べて、わずか三〇〇平方メートルほどであろうか、狭い頂上部には、九本柱の高床式掘立柱建物と、四本柱の物見櫓と考えられる掘立柱建物のほか、同じく掘立柱の塀と、頂上部周縁には、これら

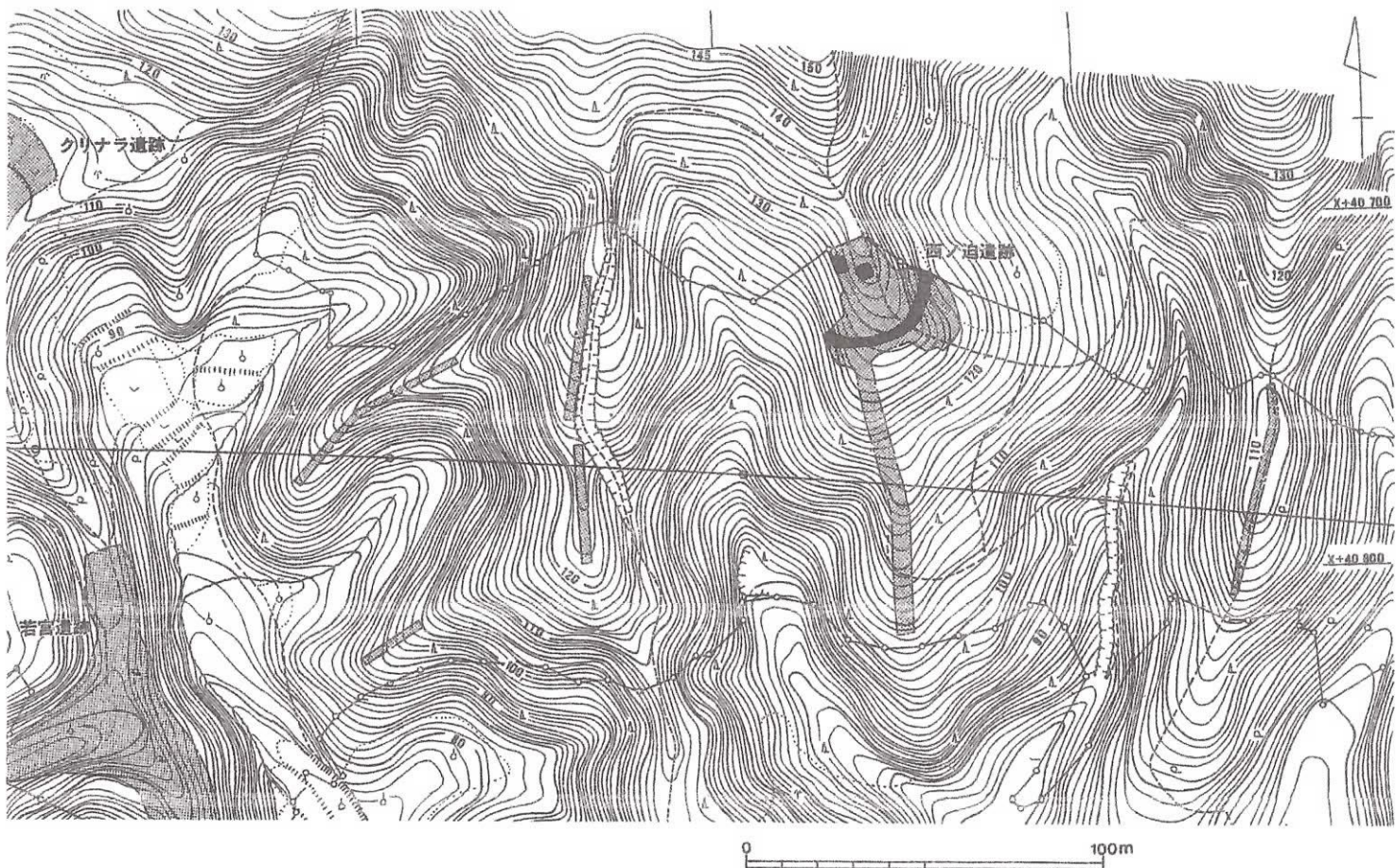
の施設を取り囲む柵列が認められた。発掘調査の過程で出土した遺物には、多量の弥生土器とともに、土玉・分銅形土製品・硯石などのほか、石鏃・石剣・礫石ついでいしがある。

さて、この環壕集落遺跡の性格をめぐって、頂上部の狭隘さや、住居痕跡のないことなどから、ここが祭祀に関連する空間であり、また上述の高床式建物も祭祀に係わる施設と考える傾向が強い。しかし、私は、防禦性の強い中世の山城のような、いわゆる高地性集落と考えたい。というのは、まず三重環壕において堅固な防禦性が見てとれるのである。つぎに、環壕内から出土した石製武器類を見すごせない。六点以上の磨製石剣のほかに、石鏃二〇〇点以上・礫石三〇〇点以上という多量の武器は、社会的緊張状態の発生を物語るにじゅうぶんな遺物である。

ところで、日本の歴史において、山城が発達するのは、中世の戦国時代のことである。この山城の先駆的なものが、弥生時代の高地性集落である。中世の山城が、群雄割拠のまさに戦国時代の所産であることと類似した現象として、弥生時代後期の高地性集落は、倭国大乱の所産といえる。そういう目で両者を比較すると、防禦性が高く、堅固なことに比べて、頂上部が狭隘で、施設物に乏しい。加えて、投石用の礫石も出土するなど、共通点が見出せる。つまり両者は、見張り所であり、そして、



西ノ迫遺跡から筑後平野東半部への眺望(140度の視角)



西ノ迫遺跡周辺地形図(1/2,000)

福岡県教育委員会, 1993 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-25-』



24	紫雲出山	三豊郡詫間町荘内	362	340	IV期
25	神殿	善通寺市吉原町	250~300	240~290	IV期?
26	飯野山	綾歌郡飯山町飯野山	410	400	V期初頭
27	城山	坂出市西庄町	440~430	390~420	IV期?
28	常山	坂出市福江町	219	200	IV期
29	高帽子山	坂出市加茂町鴨ノ庄	150~200	140~190	IV期~V期初頭
30	明神原	坂出市加茂町北山	150	140	IV期~V期
31	国分台	綾歌郡国分町国分	370~400	360~390	IV期~V期
32	上佐山	高松市池田町	255	200	IV期
33	白山山頂	木田郡三木町下高岡	200	170	IV期
34	屋島南嶺	高松市屋島	275	270	III期
35	源氏ガ峰	木田郡牟礼町源氏ガ峰	217	160	IV期~V期?
36	上野山	大川郡志度町鴨部	200~280	190~270	IV期
37	高見島	仲多度郡多度津町高見島	297	290	土器片のみ
38	心経山	丸亀市広島町青木	220	190	IV期
39	鷲ヶ峰貝塚	高松市女木町女木島	180	175	IV期
40	壇山	小豆郡土庄町豊島	320	315	IV期
41	鷲羽山	倉敷市大島村	50~112	40~100	IV期
42	神道山	倉敷市下津井町	100~120	80~100	IV期
43	岩滝山	倉敷市田の口	167	160	IV期?
44	的場山	玉野市玉	160	150	III~IV期
45	種松山(真菰谷)	倉敷市粒江真菰谷	160~258	140~240	III~IV期
46	福南山山頂	倉敷市林	200~280	180~260	IV期?
47	貝殻山	岡山市宮浦町金上	283	270	IV期~V期初頭、北方尾根上の殿山(比高90)との関連
48	大谷尻	美馬郡三野町勢力	135	50	IV期~V期初頭、環壕
49	カネガ谷	鳴門市大麻町萩原	80~120	100	V期初頭、環壕、小形ぼう製鏡、鍛造袋状鉄斧
50	大山神社	飾磨郡家島町大山神社	220	150	IV期
51	壇神山	揖保郡太子町矢田部	165	150	III期
52	片山東山	龍野市龍野町片山	220	195	IV期
53	頭高山	神戸市西区学園西町	100	60	IV期 磨製石剣
54	表山	神戸市西区井川谷町上脇	80	40	V期初頭 環壕、小形ぼう製鏡、鉄製釣針、刀子、鉄鏃
55	青谷	神戸市西区玉津町水谷	110	70	IV期 磨製石剣、石戈、小形ぼう製鏡
56	城ヶ谷	神戸市西区井吹台西町	100	65	IV期~V期前半 壕
57	西神第50・65地点	神戸市西区春日台	100	64	IV期 銅鐏型未製品
58	塩壺・塩壺西	津名郡淡路町岩屋	50~70	45~65	V期
59	禿山	津名郡東浦町白山	120	70	V期
60	尼ヶ岡	津名郡東浦町白山	125	75	V期
61	白山真土	津名郡東浦町白山	100	50	V期前半
62	舟木	津名郡北淡町舟木	160~200	150~190	V期~古墳時代初頭
63	おぎわら	津名郡北淡町	250~300	240~290	V期中ころ
64	品ヶ谷	津名郡津名町大谷	約80	約70	IV期末~V期初頭
65	飛谷	津名郡五色町	約60	約50	IV期
66	南辺寺	三原郡南淡町	270	260	IV期?
67	伯母野山	神戸市灘区篠原	200	160	V期前半
68	金鳥山	神戸市東灘区本山町北畑	200	190	IV期
69	会下山	芦屋市三条町会下山	180	160	V期前半

※住所は合併前の旧市町村名で記載している

高地性集落の分類

抽出した高地性集落はA・B・Cの3つに分類することができる。

A型高地性集落

丘陵・台地・山頂・山腹に立地し、日常的居住環境を形成する山住みの集落において、環壕あるいはV字・葉研形の壕、犬走り・切り岸、土塁や柵などの軍事的防御的遺構が付随することによりその集落自体に高地性集落としての機能が付随したもの。例えば山住みの集落の中に高地性集落が同時併存で出現したり、また一つの丘陵性集落がその変遷過程で高地性集落に変貌したりすることが考えられる。

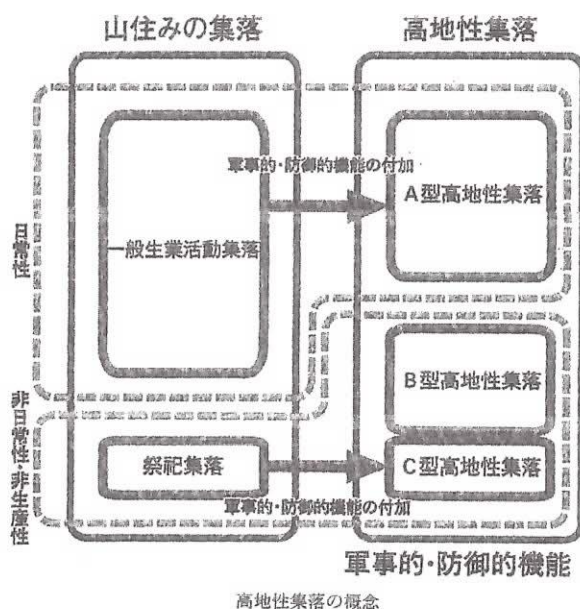
B型高地性集落

集落立地の選定原理からみた隔絶性の抽出で抽出された非日常性を具有する集落で、その形成自体が高地性集落として独立した存在であるもの。これは前述したように弥生集落の分布・立地・景観から抽出する方法で、未調査の遺跡を対象とすることができる唯一の方法である。ただA型に比べて分布・立地・景観の把握のみに頼らざるを得ず、抽出には常に主観と曖昧さを残す危険性を含んでいる。

C型高地性集落

非日常性と非生産性を具有する祭祀集落に環壕や柵などの軍事的防御的遺構が付随したもの。例としては鳥根県松江市田和山遺跡（比高40m）や兵庫県和田山町大盛山遺跡（比高50m）があげられる。田和山遺跡はⅣ期に三重の環壕をめぐ

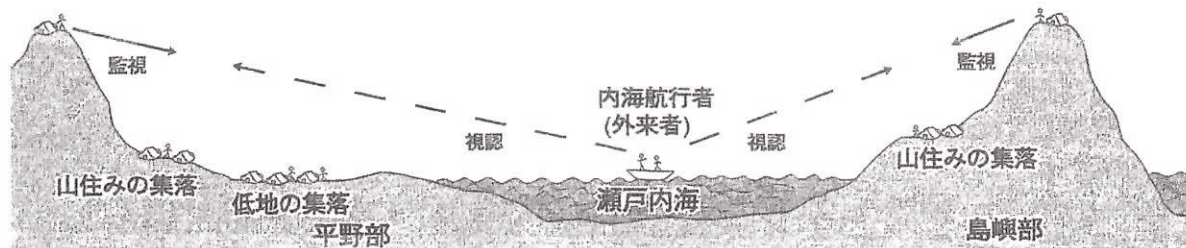
らし、環壕内側の丘陵頂部には周囲を柵で二重に囲まれた掘立柱建物群が構築される。環壕底面につぶて石と思われる大量の自然礫が集積していた。その眺望は良好とはいいがたく、銅剣形石剣などが出土しているものの、遺物組成も低地の拠点集落ととくに変わるものでもない。その構造から祭祀遺跡の範疇として捉えられるが、類似した構造を有する大盛山遺跡とともに祭祀としての場の形成や行為が結果として区画や武威、あるいは濱田竜彦が指摘するような模擬戦を表現した軍事的防御的施設やつぶて石や石剣などの遺物を伴うこととなったのではないだろうか。私はこれらも高地性集落の範疇でとらえ、C型とした。



高地性集落の概念

B型高地性集落

- ・監視装置
- ・地域共同体のランドマーク
- ・防御的機能



瀬戸内海の高地性集落模式図

柴田昌見, 2006 「中・西部瀬戸内の高地性集落と山住みの集落——特に遊瀬～伊予瀬～安芸瀬沿岸域を中心として——」『古代文化』第58巻第Ⅱ号, 財団法人 古代学協会

鉄の武器

鉄製武器の登場

鉄製の武器には、劍、矛、戈、矢じりのほかに、刀が加わります。

日本列島における鉄器の出現は、およそ2400～2300年前の弥生時代初頭に遡ります。福岡県今川遺跡から出土した矢じりも、これら初期の鉄器の中に加えてよいものでしょう。ただ、この矢じりは、その後の鉄製武器の展開にはつながりません。弥生時代における鉄製武器の本格的な展開は、2100～2000年前、弥生時代中期の中ごろからのことでした。

鉄劍の出現と展開

接近戦用の武器である劍、刀、矛、戈のうち、弥生時代を通じて最も数多く、また最も広い地域で用いられていたのは劍でした。弥生時代の鉄劍は現在、その出土数が150例を越えており、九州から関東地方までのきわめて広い地域から見つかっています。これに対して、刀、戈、矛は、いずれも十数～数十例程度で、北部九州に分布が集中しています。

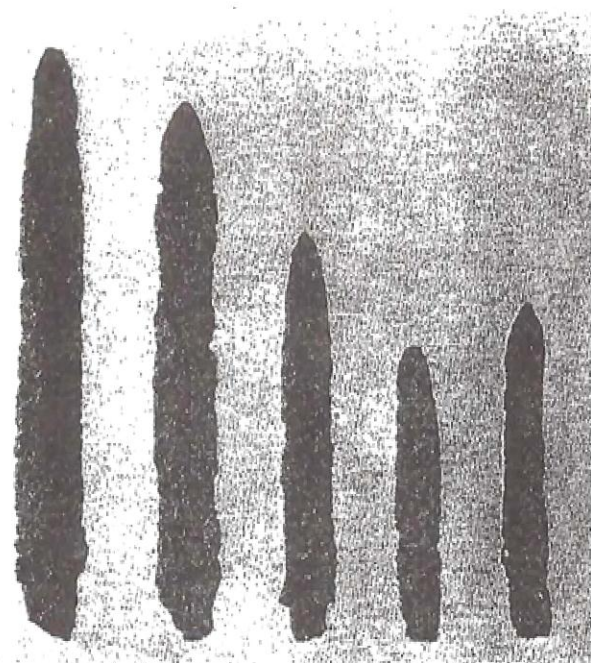
鉄劍は、2400年前ころ、中国大陸の春秋・戦国時代末期に使われはじめ、前漢が成立する2200年前ころまでに、長さ1m前後の長い劍が盛んに作られるようになりました。このころの鉄劍は、中国式銅劍の影響からか、柄に差し込む茎の部分が非常に長いことが特徴です。やがて2100年前、朝鮮半島に楽浪郡が置かれると、朝鮮半島にも中国大陸系の長劍が流入します。そしてほどなく、茎が短く、劍身の長さ30～60cm程度の朝鮮半島特有の鉄劍が誕生したのです。

弥生時代の鉄劍には、この朝鮮半島の鉄劍と区別がつかないものがたくさんあります。また、なかには中国製のものに似た茎の長いものも見られます。いずれにしても、鉄劍出現以前から使われていた銅劍の影響は全く見られず、鉄劍の多くは朝鮮半島製、一部は中国製であったと考えられています。

ただし、日本列島製の鉄劍が無かったわけではありません。弥生時代後期になると、朝鮮半島や中国では例のない、長さ20cm以下の短い鉄劍が数多く見られるようになります。短い鉄劍が作られる背景に、鉄素材の不足を想定する説もありますが、一方で、これらの短劍が、弥生時代中期の石劍に長さが似ていることからすれば、石器が消滅する時期に石劍に合わせた長さの鉄劍が作られた、と考えることもできるでしょう。

鉄刀・鉄矛・鉄戈

鉄刀、鉄矛も、ほとんどが朝鮮半島・中国製と考えられています。同じころの中国大陸で、鉄刀が実戦用の武器として発達し、鉄劍にとってかわっているにもかかわらず、弥生時代に鉄刀が武器として発達しなかった点は興味深い現象と言えるでしょう。弥生時代の人々にとっては、劍で戦うことこそが意味のある行為だったのかもしれない。



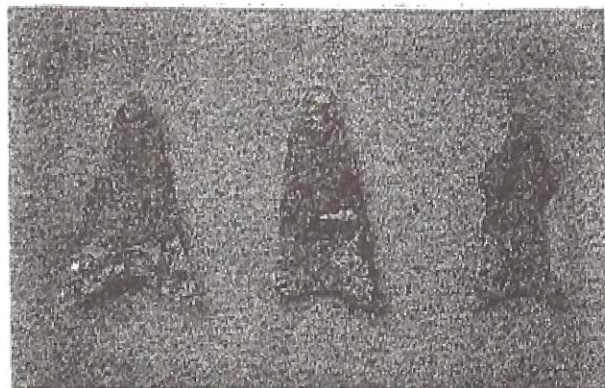
鉄劍(左長さ31.4cm)／群馬県有馬遺跡



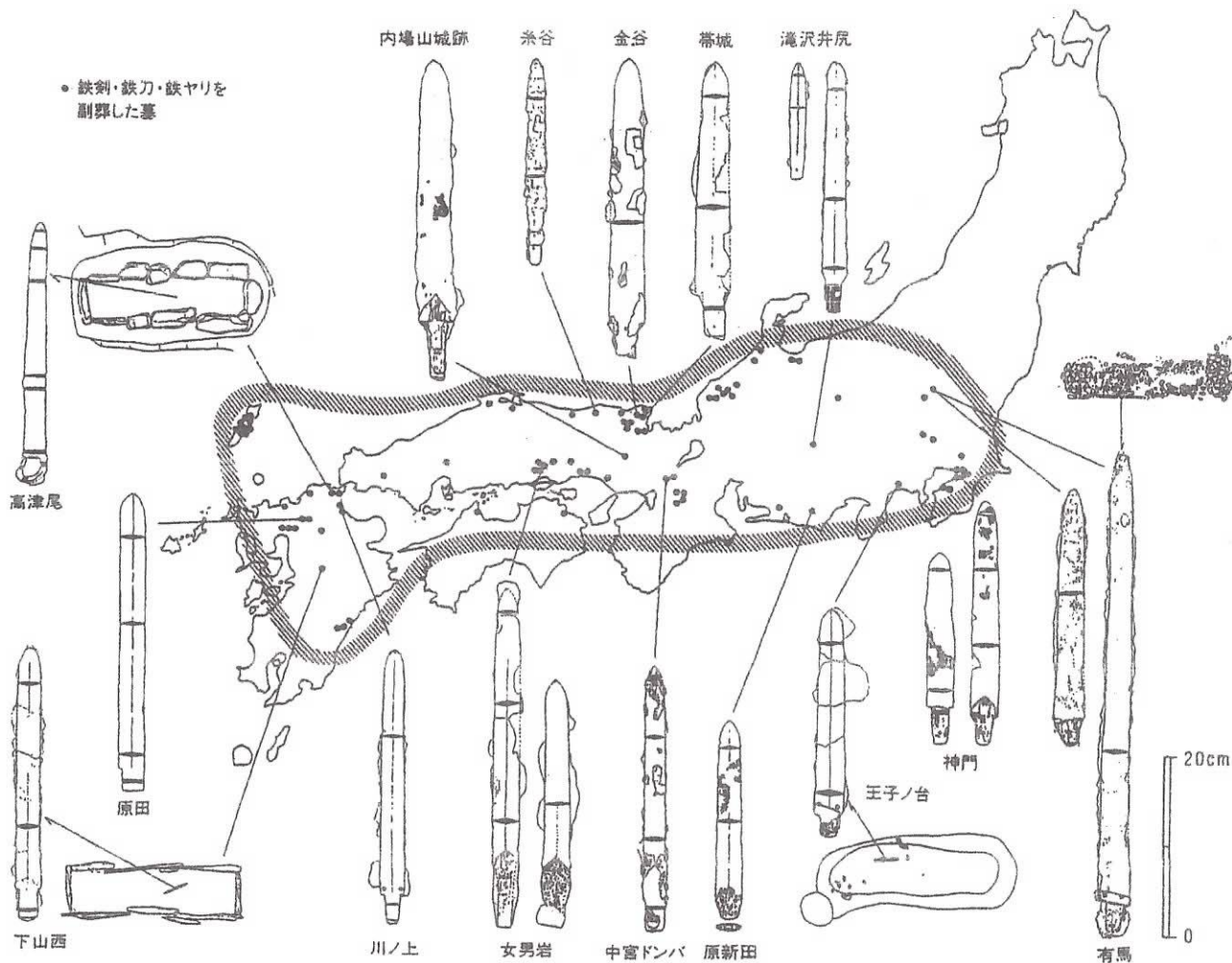
鉄矛(長さ22.6cm)／福岡県道場山遺跡

鉄鏃の出現

上記の鉄製武器類が、力の象徴としての意味を強く持ち合わせているのに対し、鉄鏃は当初から、石鏃以上の攻撃力をめざした純粋な武器として出現しました。



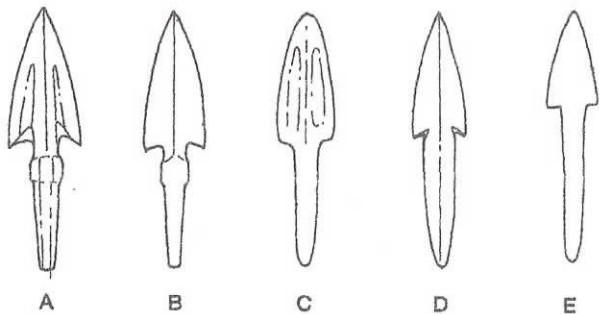
鉄鏃(左長さ3.2cm)／福岡県吉ヶ浦遺跡



弥生時代終りころの武器と戦いのひろがり
(鏃)

国立歴史民俗博物館, 1996~97 『倭国乱る』 朝日新聞社

銅鏃の形態分類



銅鏃形態分類

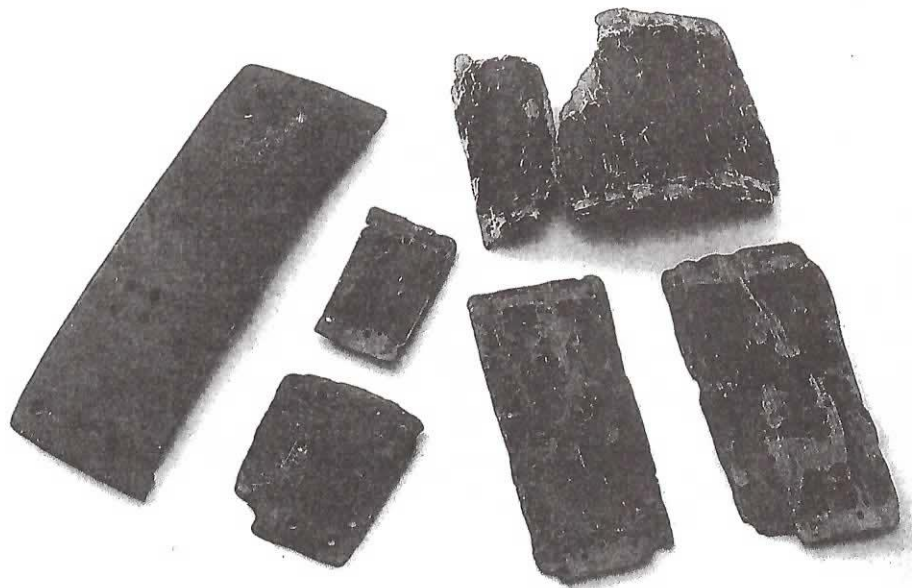
A類・・・原の辻を代表する中期後葉の銅鏃

B類・・・A類からやや退化傾向をみせ、篋被の造りが雑でやや扁平となる。

C類・・・逆刺の造りが弱く、篋被が消滅する。樋が特徴である。

D類・・・断面三角形を呈し、逆刺は短い鋭い。逆刺は、茎の側面から削り出す。

E類・・・茎が刃部よりも長くなる。造りも概ね雑となる。



㊦ 組み合わせ式の木甲
(岡山県南方(済生会)遺跡/弥生中期中葉~後葉)

南方(済生会)遺跡で出土した木甲の部品の厚さは3~5mm。表面は黒漆塗り。広葉樹の薄板で作られている点で軽量性と機動性に富む。皮などで作られた內衣と合せることによって強度を増していた可能性も指摘されている。



㊧ 倭人の戦士(弥生中期/国立歴史民俗博物館蔵)

弥生時代の木甲には、伊場遺跡のように一木を削りだして作られるものと(割貫式木甲)、短冊形などの部品を組み合わせて綴じて合せていくもの(組合式木甲)の二種類が存在することが明らかとなっている。組み合わせのタイプが弥生時代中期、一木を削り貫くタイプが後期以降に属し、時期的な変遷を追うことが可能である。

割貫式の事例となる福岡県雀居遺跡の木甲は後胴の右半分の破片で、表面に繊細な文様を刻み、茶褐色の顔料を塗布している。

組み合わせ式の木甲は、黒漆を塗ることも多く、部品で出土しても、認知することが可能であり、報告例は増加している。現状では、北部九州から北陸にいたるまでの地域で出土が確認できる。岡山県南方(済生会)遺跡からは三〇点を超える部品が出土しており、国立歴史民俗博物館の春成秀爾教授によって復元が試みられている㊦。

防御するための武器

『魏志倭人伝』抜粋

『魏志倭人伝』には、倭人が用いた武器に関する簡単な記述があり、その一つに盾が数えられている。

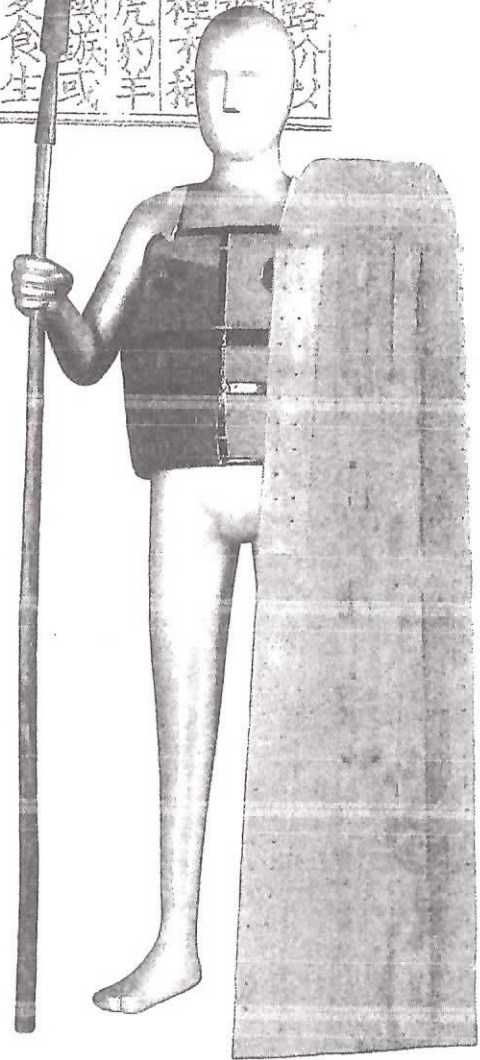


盾（鳥取県青谷上寺地遺跡／弥生後期）

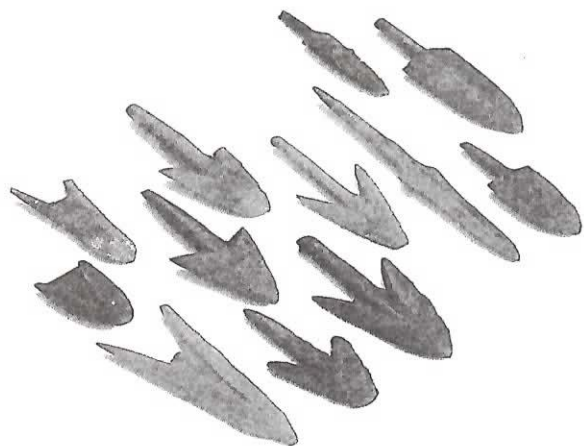
この盾は長さ115.5cm、残存幅31.4cm、厚さ1cm。紐綴じ用の小孔列があるほか、周囲に1.2cm幅の縁取り痕跡が残る。この盾には把手の痕跡は残らない。

戦士がもつ盾は大阪府鬼虎川遺跡で出土した弥生時代中期前葉のものを復元したものだ。材質はモミ、長さは一三三センチ、幅は三五センチ前後と推定されている。表面は赤く塗られ、中央部には縦方向に盾の把手を付けた痕跡が残る。鬼虎川遺跡における盾の出土から四半世紀の時を経て、弥生時代の盾の出土数は確実に増加し、その様相が次第に明らかとなりつつある。

結果、弥生時代の盾は、①木で作られ、その用材にはモミを用いることが多いこと、②弥生時代前期末には出現し、後期以降に類例が増えること、③赤色顔料などを塗布するものが多いこと、④製作技法や形態によって複数のタイプに分類可能なこと、⑤近畿を中心に九州から北陸・東海に分布する、等々が明らかになってきている。



身を守る戦士（本館）



銅鏃
(鳥取県青谷上寺地遺跡／弥生後期)



復元された高層建物

(CG 制作：鳥取環境大学浅川滋男研究室)

(鳥取県青谷上寺地遺跡／弥生中期～後期)



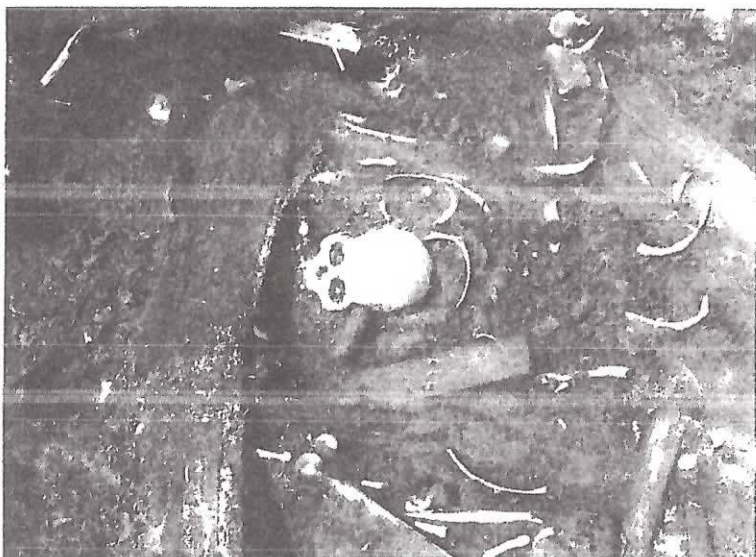
骨鏃

が高く、銅鏃が実戦において使用されていたことが証明された。

このような殺傷人骨のうち、治癒傾向が認められるのは一点だけであり、ほとんどは受傷後まもなく死亡したと考えられる。また、人骨には殺傷痕とは異なる削り取られた痕跡がみられることから、一度埋葬された後に掘り返されたと考えられる。日本初の弥生人の脳として話題となったように、人骨の中には脳組織の一部が遺存しているものもあり、埋葬後それほど時間のたたないうちに掘り返しと再埋葬が行われたようである。

青谷上寺地遺跡から出土した人骨において特筆すべきは女性人骨の多さであろう。現在のところ、判別可能な人骨のうち、頭蓋骨では半数、寛骨では三割を女性人骨が占めている。他の遺跡においても戦いの犠牲と考えられる女性人骨はみられるが、全体の比率としては圧倒的に男性が多く、戦闘に従事していたのは男性であることがうかがえる。松木武彦氏による弥生時代の戦闘の復元では、女性が戦闘の矢面に立つのは、集落内に外敵の侵入を許した時となっている。背面に傷を負った痕跡が多いのは、逃げ惑うなか、攻撃されたためであろうか。果たしていかなる理由で青谷上寺地ムラが襲われたのか、なぜわざわざ遺体を掘り起こし環濠へ再度埋葬するという特異な行為がなされたのか。現時点では不明な点が多いが、女性や小児をも含む多くの命が奪われる災厄に見舞われたことは間違いないであろう。

殺戮があつたのか



㊦ 溝から出土した殺傷人骨
(鳥取県青谷上寺地遺跡／弥生後期)



㊧ 銅鏃が刺さった寛骨
(鳥取県青谷上寺地遺跡／弥生後期)



㊨ 殺傷痕のある頭蓋骨
(鳥取県青谷上寺地遺跡／弥生後期)

鳥取県鳥取市青谷町に位置する青谷上寺地遺跡。山陰地方の拠点集落跡として著名なこの遺跡から弥生時代の凄惨な戦いの様相を伝える人骨が出土した。

人骨は遺跡東側の環濠から、無秩序に散らばり、折り重なるようにして発見され㊦、総数は五三〇〇点を超す。少なくとも一〇九体にのぼるこれらの人骨には女性や小児のものも含まれており、なかには人為的に傷つけられた痕跡や金属製の武器を伴うものも存在する。すなわち、環濠から出土した人骨は、戦いの被害者と考えられるのである。

殺傷痕のある人骨は一〇点、個体数にすると少なくとも一〇体分に認められ、小児・成人ともに背部に多い。このうち、頭蓋骨における殺傷痕は五点にみられる。㊨は年齢一五〜一八歳程度の女性の頭蓋骨で、前頭部に頭蓋腔に達する紡錘形の刺突痕が認められる。

金属製の武器を伴う人骨は四点確認されている。㊧は成人男性の左寛骨で、左外側から内側に向かつてほぼ完形の銅鏃が貫通している。また、後方には薄刃の武器（鉄製武器か）によると思われる切創痕も認められた。このことから、この男性は遠方から弓矢で倒されたのち、至近距離から斬りつけられたと考えられる。ほかの人骨に嵌入している金属器も、その形態から銅鏃の可能性

朝鮮侯の準は朝鮮王を僭称していたが、燕から逃亡してきた衛満の攻撃を受けて国を奪われ、その側近と宮女をひきつれて海に浮かび、韓の地に住み家を定めると、勝手に韓王を名のった。その王系は絶えたが、現在も韓の国にはその祭祀を続けている者がある。漢の時代には楽浪郡の支配下に置かれ、季節ごとに役所にやってきて朝謁をしていた。

桓帝から靈帝の末年にかけてのころ（一四七―一八九）になると、韓濊（韓に近接した濊族？）の力が盛んとなって、楽浪郡やその配下の県（の）の力ではそれを制することができず、民衆は多く韓国に流入した。建安年間（一九六―二一〇）、公孫康は屯有県以南の辺鄙な土地を分割して帯方郡を作り、公孫模や張敞らを遣ってこれまで取り遺されていたその地の中国の移住民たちを結集し、兵をおこして韓濊をうたせた。その結果、韓国に流入していた移住民たちも少しずつ戻ってくるようになった。これ以後、倭と韓とは帯方郡の支配を受けることになった。景初年間（二三七―二三九）、明帝は帯方太守に任じた劉昕と、楽浪太守に任じた鮮于嗣とを遣り、秘密裏に海からそれぞれの郡に入って郡を平定させた。「（そうしたあと）韓の諸国の臣智たちには邑君の印綬を授け、それに次ぐ実力者たちには邑長の位号を授けた。